

2021. 7. 4 (日) マタイ26:14~16

26:14 そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行って、

26:15 こう言った。「私に何をくれますか。この私が、彼をあなたがたに引き渡しませう。」すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。

26:16 そのときから、ユダはイエスを引き渡す機会を狙っていた。

<説教>

主イエスは弟子たちに、二日たつと過越の祭りになり、ご自分は十字架につけられるために引き渡される、と言われました。(26:2)

一方、ユダヤの祭司長や長老たちはイエスをだまして捕らえ、殺すことは、過越の祭りの間はやめておこうと考えていました。(5)

もちろん、イエスが言われたとおり、神のご計画どおりになるのですが、そのために〈イスカリオテのユダ〉の〈イエスを引き渡す〉「裏切り」という悪、罪を神はお用いになるのです。

それにしても何故〈十二人の一人〉すなわち十二弟子の一人であるユダが〈イエスを引き渡す〉裏切りに走ったのでしょうか。

この問いは究極的には神とユダ本人しか知らないことですが、マタイの記したところによれば、やはりユダ自身の金銭欲、食欲ということになるでしょう。

「私に何をくれますか。」(新改訳3版「いったいいくらくれますか」)とユダの方から〈祭司長たちのところへ行って〉もちかけたことでした。

彼らはまさか十二弟子の中からそんなことを言う者がいるとは思ってもいなかったことでしょう。

何と言っても十二弟子はいつもイエスと一緒にいました。

そしてパリサイ人等が弟子たちに悪意を持って質問して来ても、いつもイエスが答えて弟子たちを守ってくださっていました。

十二弟子たちはそれほどイエスに愛され、守られ、助けられ、恵みを受け、恩を受けて来ていました。

それなのに何故?と思ったかどうかわかりませんが、そんなことは祭司長たちにとってはどうでもよかったことでもあったでしょう。

とにかく彼らにとってはイエスの身柄を逮捕できれば良かったのです。

マルコ(14:11)、ルカ(22:5)によれば、彼らはユダの提案を喜んで受け入れました。

これで〈民の間に騒ぎが起こる〉(マタイ 26:5)ことなくうまくイエスを捕まえることができる考えたからでしょう。

喜んだ彼らは〈銀貨三十枚〉をユダに〈支払った〉のです。

マルコやルカによれば〈金(直訳:銀貨)を与える約束をした〉のです。

「銀貨三十枚」は律法によれば奴隷一人の値段でした(出エジプト 21:32)。

彼らはイエス・キリストに「神を冒瀆する者」という烙印を押し、見下していました。

彼らにとってイエスは「生ける神の子、キリスト」どころではなく、精々一人の奴隷と

同等でしかありませんでした。

そのように彼らはイエスの「有り難さ」が分からず、イエスの尊い「価値」を全く低く見ていました。

それで〈わたしが彼らに値積もりされた、尊い値〉の〈銀三十枚〉(ゼカリヤ 11:13)と主なる神は怒りと皮肉を込めて言うておられたのです。

彼らの喜びは自分たちの願望、欲望が叶うという自己中心でしかありませんでした。

もちろんユダのことなど本当の意味で考えてもいないし、心配もしていませんでした。

ユダは彼らにとっては自分たちのために「利用」できる都合良く現れた「駒」に過ぎませんでした。

だから当然、「弟子たるもの、自分の先生を裏切るものではない」などとユダを諷めることもしませんでした。

自分たちの願いが叶い欲望が満たされるためなら他人が悪を行おうが罪を犯そうが何とも思わない、むしろ喜ぶのです。

そして心の中では「ふん、自分の大事な先生を裏切り、安く叩き売る恩知らずめ、薄情者め」とユダをも軽蔑してもいたことでしょう。

〈正義とあわれみと誠実をおろそかにしている〉(マタイ 23:23)とはイエスが律法学者たちに言われたことですが、祭司長たちも同じでした。

さて、ユダの金銭欲ですが、先週学んだベタニヤのシモンの家での出来事で、非常に高価な香油をイエスに注いだ女の人を見て、「何のために、こんな無駄なことをするのか。この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」と憤慨した弟子たちのことがありました。

ヨハネの福音書(12:4-6)では、〈弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。…彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった。〉とはっきりと記されています。

「だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることとなります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。」(マタイ 6:24)とイエスは教え、〈みことばを聞くが、この世の思い煩いと富の誘惑がみことばをふさぐため、実を結ばない人のこと〉(13:22)もお話しになっていたことでした。

〈金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。〉(1テモテ 6:10)と使徒パウロも後に言うのです。

〈金銭を愛すること〉、〈富の誘惑〉は明らかに悪魔の惑わしであり誘惑です。

ルカはこのとき、〈十二人の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った〉(ルカ 22:3)と記しています。

祭司長たちの約束を受けたユダはいわば悪魔と約束をしたとも言えます。

そうして悪魔のユダに対する支配はますます強くなったと言えるでしょう。

もちろん、そんな悪魔との約束はとっとと破棄して、イエスに立ち返る悔い改めの機会はあと僅かな時間ですが残されてはいました。

しかしユダは〈ユダはイエスを引き渡す機会を狙って〉行くことになります。

ユダがいつからどのようにして悪魔に惑わされるようになったかは分かりません。

しかし、イエスがユダと一番近くにごくごき、ユダはイエスの教えを聞き、イエスの愛と恵みとあわれみを十分に受けて来たことは確かなにもかかわらず、イエスに信頼と希望を置かず、助けを求めず、むしろイエスに失望し、絶望したことは全くユダの罪であり、ユダの責任です。

そして「この私がイエスを祭司長たちに引き渡す」と考え、言い、実行したことは即ちイエスを自分の思い通りに支配しよう、支配できるとしたユダの罪そのものなのです。